

## Erikson の生涯発達論はいかに読めるか

矢野 泉

A Consideration on the theory of Erikson Life Cycle Development .

Izumi YANO.

### 1.問題設定

生涯発達論(LifeCycleDevelopment)の談論において、Erikson,E.H(以下、エリック・エリクソンと称する)の学績を知らないものはいないだろう。その妻ジョウンはエリックとの共著というかたちで『ライフサイクル、その完結〈増補版〉』(2001=1997)を出版した。

本稿は、ある姉妹たちの語りを手掛かりに、生涯発達論の読み方についての知見を示す。エリック・エリクソンとジョウン・エリクソンの共同研究は、生物学的な個別発達ではなく、心理と社会の交差、歴史との相関的発達であることを意味する。「人間は何歳頃にどの発達段階に達するかには大きなバリエーションがある。」(E・H・エリクソン&J・M・エリクソン,1997=2001:151.)ひとは年齢で画一的に区切られず、歴史的、社会的文化圏のなかで他者と関わり合い、より合わさって発達する。ある人が、乳幼児期の発達段階のまま年老いていったとしても、その人が関わり人生を支えあう重要な他者が、成人期や老年期の発達段階にあって、世話をする歴史的、社会的文化圏を構成できるならば、その人の生涯発達において支障はないのではないか。

「ハヴィガーストのように、人生を年齢によって」「6期に分けて」「各期に人間が果たすべき『発達課題』(development task)」を設定し、課題を達成すればその後の発達課題の達成も困難になるとされた」発達論や、「エリクソンは人生を乳幼児期、幼児前期、遊戯期、学童期、青年期、前成人期、老年期の8期に分け」、「各期はふたつの対立する命題が併存し心理・社会的危機にさらされており、一方が他方に勝ることが重要であるとした」など、発達の失敗や発達への勝利を決定論的にする読み方がある(たとえば、「生涯発達論」『よくわかる教育社会学』2012年:170-171)。しかし、こうした読み方は、ダイバーシティを生きる現代人の発達感覚を刷新できるのか。

かつて筆者も、寿命によるが、だれでもが乳児期から順番に各ライフステージを経て老年期ひいてはジョウン・エリクソンが論じた超老年期を生きるのかとエリクソンの生涯発達論を捉えていたが、こうした読み方は変えられるべきであることが本稿でわかった。生きづらい社会であればあるほど、人間は自己に足りないものを補うためにも、他者と関わり合い、支えあって生きていく。さらに生きづらい場合は、孤立し立ちいかなくなる場合はあるだろう。筆者は幸運にも、暮らしを支えあう、ある兄弟姉妹の参与観察により、エリクソンの生涯発達論を読み直すことができた。

生涯発達とは自己と他者の成長がつくる、いわば織物アートであり、転機となるクライシスを織り込むことである。エリクソンにいわせると、「文字盤のない時計」(前掲,1997=2001)を生きること、「時間を超えて理解される本質的根源」を確かめることである。時間といっても、時間には2通りある。ひとつはタイムで、もうひとつはシーズンつまりギリシャ語のカイロス、測定できる機械的な時計の時間タイムと人生の転機ともいえるクライシス、人生の転機となるシーズンのような移り変わりである。持って生まれた個性が芽吹く人生の春があり、盛んになる夏があり、実りの秋が、枯れる冬がある。「すべてのことには定まった時期がある。植えるのに、時があり、植えたものを抜くのに時がある。」は旧約聖書の「コヘレト書」(新改訳,2017)で書かれた。「コヘレト書」研究者の神学者小友聡は、「すべてのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みには時がある」(若松・小友,2021)と論じた。短い人生の「時」はともすれば「空しい」。いずれは枯れるからである。時は空しいからこそ、日常のちょっとしたことに喜び、生きがいが見られる。このように、人間は生き、死を迎える。定められた転機、クライシスによって心理が身体とともに発達し、死をもって生涯が閉じられる。エリクソンの発達論を読むと、クライシスの失調的要素と同調的要素(たとえば、乳児期ならば、基本的不信対基本的信頼)の葛藤から生成される活力あるいは徳(virtue)注1が、つぎのライフステージへと発達を展開させる。(前掲,1997=2001:151-154)どの時期にあっても、乳児期の活力(徳)、希望が活力であると解釈できる。

本稿は、シングルであるからこそ、親族間で相互扶助するある姉妹たち注2

の歴史的、社会文化圏のライフストーリー(『語りの地平—ライフストーリー研究』,2016:VOL.1)を手掛かりとする。本稿において眼ざす歴史的、社会文化圏は、時代を生き抜いた小さな親族コミュニティである。

## 2. 歴史的、社会的文化圏—ある姉妹たちのライフ

12年ほど前、街角のある喫茶店にたまたま入ったところ、シニアの常連客のひとりと、同様にシニア経営者らしき姉妹が鏡を前に服の着せ替えをして会話をしていた。喫茶店でスタッフとお客が服の着せ替えというのはめずらしい店だという印象があり、数年おいてその店に通うようになった。経営者である姉妹に、参与観察という申し入れはすぐにはしなかったが、見聞きしたことを文章にまとめるというゆるしを得た。その店のお客はたいていシニア常連客であったので、筆者も歳月をかけて常連客のひとりとなり、ほかの常連客や経営者姉妹、その姉妹の兄弟とも親交を重ねるに至った(「老年期とコミュニティ」エリクソン 1997=2001:169-178)。親交が始まった当時、姉妹たちも常連客も、歩くのにはなんら問題がなく、活発なシニアたちであったが、シニアたちも80歳代後半となり、ほぼ杖をついて歩くようになった。80歳代後半の姉妹が、喫茶店をいきいきと活発に切り盛りすることをみるのは、還暦を過ぎ、少しずつ衰えを覚えはじめた筆者には驚きであり、魅力でもあった。人によって多様な年を重ねる過程を実際に学べたのも、姉妹たちと親交があり、さまざま教えてもらえたからでもあった。エリクソンの生涯発達論を読み直すきっかけは、この姉妹たちが与えてくれたのである。

姉妹たちは、86歳を筆頭に74歳までの6人兄弟で、上の姉妹2人と兄弟2人が未婚のシングル、3番目と4番目の姉は伴侶をなくしたシングルで、6人全員シングルだが、4番目の姉には子供5人と孫3人がいる。男女は結婚するものと考えられていた太平洋戦争前後の生まれであることや、戦後の高度成長期の初期に青春を迎えた時代や、人々の出会いが盛んであったまちの社会文化圏を含めて考えると、シングル率は高い。

歴史に観点をみると、姉妹たちの実家は戦前戦後復興期の自営業の会社経営

だった。彼女らのうち姉1と姉2と姉3は太平洋戦争前、姉4と弟2は戦後数年してある町で生まれた。玄関や居室の扉を木材とガラスで作る職人を差配するのが実家の仕事であった。姉妹たちの父は、若いころ地方から出てきて町の炭問屋で働いていた。大正時代関東大震災前のことである。

そのころの町は、船の行き交う運河に囲まれ活気があり、炭などの燃料の商いもあった。しかし、関東大震災で町の建物はほとんど倒壊して炎に包まれ、焼け野原となった。震災後の復興で、建物が再建されはじめ、建具も大量に必要とされた。そこで、炭を扱うより、建具を造って販売しよう、彼女らの父はそう考え、商売替えをしたといわれる。実家の建具屋は震災の復興需要で忙しく、家と工場は、大勢の職人や女中が出入りする大きな建物であった。

実際、姉妹たちの語りを聴くと、姉1-3では同じ家族の物語であるはずでも、姉妹によってまったく別の物語の様相をみせる。姉2は、地名や通り、昔の店屋さんの屋号まで詳しく話して書いてほしいと意見するが、姉1は、「細かくて詳しすぎる」という。具体的な記述ではなくて、抽象化された論述を求める。ライフストーリー研究でもある本稿ではあるが、具体的な記述はできるだけ削った。

姉妹たちのライフに議論を戻す。姉妹たちの父は50代で倒れたという。土地建物は売却され、姉妹たちは、飲食店や会社で働くようになった。建具屋は閉鎖したが、会社組織は残すことにしたという。彼女たちの母がなんども会社組織をつくって立ち上げ、母のあとの社長に末っ子の弟2が就いた。弟1は内装工事や会計などを担い、弟2は夢中になって仕事に励んでも、利益の出にくい鉄道模型づくりのエキスパートとなった。兄弟や親子で会社や商売をするのは、この日本でめずらしいことではないかもしれないが、成人期を過ぎると、それぞれが新しい家族を構成することもあり、兄弟姉妹とつきあう濃淡としては薄くなる。しかし、姉妹らは、半径数キロ以内に居住ないし職場を持ち、若年期より高齢後期になるまで実際生活を支えあっている。これまでに、想像していなかった事態は多々あった。だからこそ、いまでも彼女らは互いに世話あって生きている。弟2は、世話好きな母親のような3番目の姉に、乳幼児のように甘えている。甘えられることが日々の生きがいである。

弟 2「甘えられて頼れるのがいいよね。こっちもお互いさまで、買い物の時、SUV 車を運転してのせて買い物を手伝うし、家電相談、内装や水回りの修理もなんだって頼まれてやるしね。」

筆者「え。单身生活をしてるのに、そんなにも頼っているの？お姉さんたちとしょっちゅう一緒にいますね。おとなの兄弟としてそんなに一緒にいるの、めずらしいですよ？」

弟 2「姉 3 が住まいをただで貸してくれている。ちなみに、ガス水道電気代はこっちもち。姉 3 のところの風呂の方が広いし、水道代ガス代電気代の節約になるから、風呂は姉 3 のマンションのお風呂を使ってる。逆に、もうさきつき、事務所のエアコン古いからきかなくてさ、電気代ふたりもひとりも一緒だから、エアコンもったいないし、おたくエアコンあんでしょ、自宅にお邪魔して涼んでいい？」

筆者「それはちょっと。・・・稼ぎないの？」

弟 2「逆に、そっちはさ、たくさんもらってんでしょ。わかんないと思うけど、こっちは(鉄道模型づくり)は、あちこち(先行投資)ぶっこまないとなんないわけですよ。わかります？いろんなところに、先にぶっこまないとならないからさ。それをあとあと回収しないと。昔は稼げたけど、最近仕事は来なくて、資材とかなんかを切り売り、タコが足を食べてしのぐ生活をしてる。」

※2022 年 9 月 6 日.

たしかに、鉄道模型づくりやシステム構築は難儀な仕事である。筆者は、弟 2 の連発する「鉄道模型レイアウト」、「ジオラマ」「ジオラマのシステム」などの専門用語がさっぱりわからなかったため、素人でも応募できる作品公募に興味を示し、鉄道模型のジオラマが筆者にも作れるのかと勢い込んだが、公募の宛先 URL のウェブサイト <https://rail.hobidas.com/feature/387728/> (2022 年 9 月 8 日取得)におさめられた高度かつ精密なプロフェッショナルな 2022 年度の作品群をみるなり、筆者のクラフトや紙粘土による現象学模型づくり注 4 とは異次元の専門小宇宙の奥行に怖気づいた。

弟 2「パーツ(鉄道模型の部品)つくるから、こっちがやりやすいように仕事の

プロデュースなんかのマネージャーやってくれるといいんだけどね。もうさっきから、(そう)ってんでしょ？」

※同前.

彼は自分の関心事に走り、くるくると話題を変え、「逆に」「ちなみに」ということばを連発する癖があった。

筆者「家事はどうしてますか？」

弟2「ちなみに、洗濯はぜんぶ姉3がやってくれて、できあがったら(お姉さん宅に)とりにいっている。」

筆者「おかずやごはんもお姉さんたちからもらってるの？」

弟2「逆に、そういったって、のこりもんだよ。たまにだし。ちなみに、シャツがボロボロだからっていわれて、三番目の姉貴が倉庫からもらってくれた。自分はまだ着れると思ってたけどね。」

筆者「・・・。」

弟2「逆にずっとさ、あきらめていないんだよね。希望を。スポンサーがほしいわけ。いくらでも金出してやるっていつってくれるひとが。ぜったい、いるって思っているし。」

筆者「そういうお歳でも？」

弟2「夢だから。明日もそのためのプレゼンに行きます。ちなみに、お金出してくれます?仲間と(現在の事務所より)もっと広い場所で模型作るのが希望でね。・・・。(スポンサーに)なってくれます?」

筆者「それだけのものがないので、却下します。」

弟2(笑)

筆者(笑)

※2022年9月9日.

「もっと広い場所で模型を作る」といっても、現在の場所は、使わない木材やプラスチック、その他荷物が蟻塚のように空間を埋め尽くしていて、もっと広い場所を借り換えても、空間は同じく狭くなるはずである。しかし弟2は

超越期IX	姉 1-2							関わらない こと(対)関 わること 超越	9
老年期 VIII	姉 4							統合対絶望 英知	8
成人期 VII	姉 1-3						生殖性 対停滞 世話		7
前成人 期VI	弟 2					親密対 孤立 愛			6
青年期 V					同一性 対同一 性混乱 忠誠				5
学童期 IV				勤 勉 性 対 劣 等 感 適 格					4
遊戯III	弟 2		自主性 対罪惡 感目的						3
幼児期 初期II	弟 2	自律性 対疑惑 意志							2
幼児期 I	基本的信 頼対不信 希望								1 弟 2
時期	クライシ ス 生成 する活力								表 2 漸成段階発達図

「もっと」広げたいという。

弟 2 はいまでもライフサイクルの乳児期の活力(徳)を生成させ、ずっと「希望」が底力となって、日常に邁進している。前述したとおり、エリクソンによれば、「希望」は生涯通じて、我々を支える。姉弟はそれぞれ多様だが、勇躍し、ものごとに挑戦するという在り様では、姉 3 と弟 2 は通底する。

この表は、エリクソンのライフサイクルの表 1 ※エリクソン(1997 =

2001:73 他)をもとに筆者作成。この表は、姉3のまなざしに寄り添う角度に立って観察した結果である。

姉1「悩み相談というのは、したことないわね。したって仕方ないじゃないの。なんとかなるわよ。」といい、「うちは上の姉二人がダメになっても姉3でも姉4でも元気で、しっかりしてるからどうにかなるでしょ。」

姉2「あたしなんか、いちじは、仕事3つもかけもちしてたんだから。」「糊くださいって、よくいわれたのよ。」「疎開先はかやぶき屋根でお蚕さんが。」

姉1「それは関係ないわよ。そういうことじゃなくて、先の心配ばかりしたって仕様がないうってこと。」「いつ倒れるかなんかわかんないわよ。倒れてからああ死んじゃったってというのがいいわね。(世話の)迷惑もかけないしさ。父親も突然死だったわよ。この店もいつまでできるともわかんないし、いつやめるともわかんないわね。」

※2022年6月2日。

姉3「あたしは、いっぱいいる友達とでかけるのが楽しみだから。あたしもあたしの同級生だって80代半ばだけど、同級生と、こんどあっちいこう、つぎはこっちいこうって話してるわよ～。旅行にももう一回はいきたいわね。このまえはおてんき号で東京湾めぐってディナーよ。だもんで、あれをやりたいこれをやりたいって忙しいから、じっとしてるひまなんてないのよ～。さあっ、もう、朝の仕事も昼のパートも終わったから、みよちゃんちに、行ってくる。そうだ、矢野さん、ラインの動画、消えちゃったのよー。これ、どうしたらいいかね？」

筆者「動画は期限が終わると消える設定だから、ダウンロードしてスマホのメモリに入れておくといいですよ。」

※2022年4月7日。

姉4「ひとりじゃねえ～、ごはんもね、なかなか。いまは、おちびさんの孫たちと一緒にごはんを食べるのが楽しくてね。ひとりだと、食事すすまないのよ。矢野さん、そんなに大変じゃないのよ、子育て。子どもは何人子供がいても一



緒よ～。おむつがとれてひとりで排泄できるようにして、親に食べさせてもら  
うんじゃくて、ひとりで食べられるようになれば、子育て、もうおしまい。大  
変そうだけど、やることは2つ(排泄と食事)だけだから簡単。」

※2019年5月5日.

「なんとかなるわよ。」といている姉1に繰り返しきいてみると、なんとかな  
るというわけでもないという。「そりゃーねー、矢野さんー、たしかにいつ  
たわよ、でも、こうだといっている、こうだってわけじゃないのよ～。」

※2022年8月31日.

と語る姉1には、超老年期の「関わること、対、関わらないこと」といった同  
調的要素と失調的要素の葛藤が感じられる。姉3には、ジョウン・エリクソン  
が補論した老年期の先の「第9の段階」、超越トランセンデンスのシーズンに  
ある、人生を楽しむような感覚、ダンスをしているような注3 生き生きとした  
「トランセンダンス」(前掲:187-189)が感じられる。「第9の段階」の「社会  
秩序の原理」についてジョウン・エリクソンは特筆しなかった。よって、本稿  
では、「社会秩序の原理」に縛られない段階と捉え、以下の表2「第9の段階」  
の「社会秩序の原理」を「無」とする。

エリクソンのライフサイクルの表2 ※この表は、姉3と同じ角度のまなざしに寄り添  
って作成された。

発達段階	心理・社会的危機(Crisis 転機)	重要な関係の範囲	活 力 (徳)	社会秩序の原理
I 乳児期	基本的信頼対基本的不信 第2	母親的人物 姉3	希望	小さな宇宙的秩序
II 幼児期	自律性対 恥、疑惑 第2	親的人物 姉1	意志	きまりごと
III 遊戯期	自主性 対 罪悪感第2	基本家族姉1-3	目的	理想
IV 学童期	勤勉性 対 劣等感	近隣、学校、学 校 代わる場	適格	触れ合い(技 術的秩序)

V 青年期	同一性 対 同一性の 混乱	仲間集団と外集 団	忠誠	イデオロギー 的世界観
VI 前成人 期	親密 対 孤立 <sup>第2</sup>	友情、性愛、競争、 協力の関係における パートナー 姉3	愛	協力と競争の パターン
VII 成人期	生殖性 対 停滞性	(分担する)労働と (共有する)家族 姉1-3	世話	教育と伝統の 思潮
VIII 老年期	統合 対 絶望	人類・私の家族 姉4	英知	祖父母性
IX 超老年 期	関わること 対 関わないこ と	地球 姉1-2	超越	無

第2は、仲間と居られる、なもっと広い場所を借り上げるためのスポンサーを見つけることが「希望」であり、姉1は、先の心配をしないことが「希望」であり、姉3は未知への挑戦と友達と会話や旅行やイベントに行くことが「希望」である。姉2の「希望」は、学校時代や昔を再現することであり、「こうだったのよ、ああだったのよ」と、だしぬけに詳細な昔語りを語りだすことにある。

表2のうち、第2にとって「母親的人物」は姉3であり、「親的人物」が姉1である。表1、表2には、生涯発達の要素と姉妹たちの在り様が交響すると考えられたところに、困みの印を記入した。超老年期は、失調的要素が同調的要素より上回ることがあり、「衰退」を覚えたとき、他者と関わることと関わらないことがバランスよく配合されるわけではない。二階屋の住人になるわけでもなく、地球環境たとえば気温や湿度の変化にも左右されやすくなるであろうし、地球という大地に足をつけ地球人として生きていて、従来、問題と感じなかったことを問題として抱えるようになることがあげられる。雨のにおいに安らぎを感じることもあれば、乾いた風に癒されることもあるだろう。コミュニティの誰かから声の贈り物をされて、生きることが励まされることもあろう。人生の第九の発達段階は、発達の問題を超越するというより、発達問題を超越することとして思料できる。発達は「しなければならない課題」ではない。超

老年期はそういう発達に関する義務的な課題はそもそもなかったのだという既知の認識枠組みからの解放もあろう。

### 3. 考察—まとめにかえて

第九の段階のまとめにあたるところに、ジョウン・エリクソンが書いたのは以下である。(前掲,1997=2001:164)

「人には頼るべき確固とした足場がある。人生の出発点から我々は基本的信頼という恵みが与えられているからである。それがなければ人生を生きることは不可能であり、それがあからこそ我々は生き続けてこられたのである。(中略)希望がいかに厳しい試練にさらされてきたとしても、基本的信頼感是我々を完全に見捨てることは決してなかった。もしあなたがまだ、生への願望や、更なる恵みや光となるものへの希望に満ちているならば、あなたは生きる理由を持っている。もし老人が第九段階の人生経験に含まれる失調的要素を甘受することができるならば、老年的超越性(gerotranscendence)に向かう道への前進に成功する」。

「関わること 対 関わらないこと」「同調的な要素と失調的な要素」どちらも「衝動」である限り、試される「試練」に「英知」や「超越」はみえない。前向きに衝動を諦めて、歳月の前進を経験に刻み、わたしたち人間はいつか死なねばならない。しかもどのようにいつ死ぬのかそれは当事者なのにおよそわからない。姉1が語ったように先の心配ばかりでは、生きていられない。「達成論」的に考え、初期から中盤にかけての発達の成功がなければ、その後の人生を生きられないなどと、「乳幼児期」に親からの慈しみが欠かせないものであったと読み切るのではなく、その人たちにとっての歴史的、社会文化圏全体が人間を慈しみ、基本的信頼を恵与してくれること、生涯発達のどのステージにもあてはまらなくても、人生の発端にも端末にも、「希望」があるということを読み直すことには意味がある。これが、最後にジョウン・エリクソンがエリック・エリクソンの生涯発達論を振り返り、教示した生涯発達の知見であると考量する。

とりわけ、本稿を除いて、これまでエリクソンの Life Cycle 超老年期に関する教育学先行研究がなかったことを基礎的研究の成果の一部とし、「あってよい知識を提供し、あってはならぬ知識を提供しなかった」（吉田章宏、2022年:43)研究姿勢との再会を成果として黙示する。

## 注釈

- 注1 ある姉妹たちの参与観察を行い、ライフストーリーを聴いた。姉妹 1～4 は年齢順、超老年期から老年期にあたり、老年期にあたる弟 1～2 については弟 2 のみ本稿では取り上げた。
- 注2 E・H・エリクソン&J・M・エリクソンの原書では、virtue と記されている。もともとのラテン語の起源 virtue にかんがみ、教育学や心理学における先行研究の翻訳で用いられる「徳」よりも、本稿は、矢野(たとえば 2018 年)の議論を参考に、発達段階を進む「活力」と捉える。なぜなら、virtue は、失調的要素と同調的要素の葛藤から現れる「力」だからである。「徳」の「達成論」ではなく、エリクソンの発達段階論を貫く柱として生き生きとした力がおかれていることは西平直のダイナミックな先行研究からもうかがわれる。西平は動きのある「徳」として論じたが、筆者は一貫して virtue を「活力」と読み取っている。ランダムハウス英和大辞典では、virtue には、「徳」「善徳」「長所」「美点」「効能」の他、「固有にして生得の力」「潜在的能力(potency)」の訳が付されている。他者との相互関係における人間の発達を潜在的に隠されていたものが現れている過程として読み解くならば、その人の良さを現わす「活力」と訳すのがふさわしいと判断する。この読み解きの根拠として、エリック・エリクソンとジョウン・エリクソン、ヘレン・クインテッサ・キヴニック著「ライフサイクルの八段階―漸成論〈相対するものの力動的均衡〉」で書かれたつぎのくだりを引用する。「その生き生きとしたかわりあい(vital involvement)をこれらの段階に関係づけたいと思う。ここ

でわれわれは『生き生きした』(vital)という語を強調したい。というのは、単なる『かかわりあい』(involvement)という語には、良いにしろ悪いにしろ、いろいろ言外の意味があるからである。しばしば、この言葉には、そこから逃げることのできない複雑な受動的なかかわりすぎ」

※訳書及び原書では「傍点」がつけられているが本稿では下線。

(時には救いのない絶望的なかかわりあい)といった意味がある。しかし、この語にもともと組み込まれている言語上の頭韻ほど明解にこの語の『根源的』な意味を説明することのできるものはいないだろう。つまり involvement(かかわりあい)という語は、人が出生前に母親の vulva(陰門)の中に含まれるという意味と結びつくからである。現代の研究が示唆するよう母親の vulva の中にいたとき、人はただ受動的に包まれていたのではなく、かかわりあうための『持って生まれついた』能力を示さねばならなかった。」(エリック・エリクソンとジョウン・エリクソン、ヘレン・クインテッサ・キヴニック著『老年期』1986=1990:31)この「～の中に含まれる」ならびに「～包まれていた」という語は、「包摂」を意味する。単なる『かかわりあい』(involvement)でないならば、なにか黙示する別の意味があるはずである。だからこそ、「人が出生前に母親 vulva (陰門)の中に含まれるという意味と結びつくから」とエリックは記した。(『老年期—生き生きとしたかかわりあい』)「その生き生きとしたかかわりあい(vital involvement)」は、「生き生きとした」とは別の意味、「活力が包摂されている」という、エリクソンらが議論した人間に関する発達段階論の特徴が読み取れる。

注3 トランセンダンス(transcendence)は、ジョウン・エリクソンの造語である。心理学者村瀬孝雄・近藤邦夫によると、8つの発達段階からなるエリック・エリクソンのライフサイクルに9段階の発達論としての議論は、『ライフサイクル、その完結』初版の時、すでにエリックらが教示していたという。第九段階は同調的要素が失調的要素に打ち勝つということではなくて、失調的要素が優ることが稀ではないこともジョウン・エリ

クソンによって論じられている。ジョウンは、増補版出版の1997年に亡くなったとされる。(村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結〈増補版〉』:20-201.)

注4 「鉄道模型モジュール LAYOUT AWARD2023」は、「株式会社某ギャラリー」の主催。

[https://artfactory-j.wisite.com/laouaward.\(2022.9.8](https://artfactory-j.wisite.com/laouaward.(2022.9.8) データ取得)に詳細は掲載されている。

指定の寸法は 355mm×308mm×500mm、作品空間体積に作品を設置する「台」の高さは 70mm～100mm、模型鉄道レールは 310mm の規定である。なお、応募要項に「台」は高さ調節可能なアジャスター敷設含むと記載がある。募集対象は、専門職と素人を問われない。しかしながら、筆者には、鉄道に対して本格的な愛着がもてないため、こうした目的での作品発表はできない。筆者にできるのは、指導を担当する現象学を用いた教育学の教材づくりである。写真左上の部分 4 棟のアパート建物は、みる高さ、みる方向に位置により、1 から 4 棟に見える。これは「お化け煙突」(東京都下「千住」にあった 4 本の工場の煙突)のような建物である。この、現象学の教材「タワーマンション現象学ジオラマ」を本稿最終頁に載せることにより公刊する。

## 参考文献一覧

- Erikson,E.H.『幼児期と社会 1』1977年、仁科弥生訳、みすず書房。
- Erikson,E.H.『幼児期と社会 2』1980年、仁科弥生訳、みすず書房。
- Erik H.Erikson,<The Life Cycle Completed A Review>1982, W.W.Norton.
- Erik H.Erikson & Joan M.Erikson,『ライフサイクル、その完結〈増補版〉』2001年、村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みすず書房(The LifeCycle Completed A Review Expanded Edition,1991,W.W.Norton).
- Erik H.Erikson,Joan M.Erikson &Helen Q.Kivnick,『老年期一生き生きしたかわりあい』1990年、朝長正徳・朝長梨枝子共訳、みすず書房(Vital Involvement In Old Age-The Experience if Old Age In Our Time>,1986,W.W.Norton).
- 酒井朗・多賀太。中村隆康編著『よくわかる教育社会学』2012年、ミネルヴァ書房。
- 新日本聖書刊行会『新改訳聖書 2017』2017年、いのちとことば社。
- 西平直『エリクソンの人間学』1993年東京大学出版会。
- 日本ライフストーリー研究所『語りの地平ーライフストーリー研究』2016年創刊号 VOL.1.
- 矢野泉「高齢者教育における回想法の役割」『日本社会教育学紀要』No.29,1993年:103-112.
- 矢野泉『「想起の方法」に関する研究』2018年、株式会社パレード。
- 矢野泉「不思議なアパートと電車のあるジオラマ」(未公刊)2022年9月11日。
- 吉田章宏『絵と文で楽しく学べる大人と子どもの現象学』2015年、文芸社。
- 吉田章宏『森の出口はどこか?ー学ぶと教えるの現象学への道』上巻、2022年、一荃書房。
- ランダムハウス英和大辞典編集委員会『ランダムハウス英和大辞典』昭和63年第4刷、小学館:2915.
- 若松英輔・小友聡『すべてには時があるー旧約聖書「コヘレトの言葉」をめぐる対話』2021年、NHK出版。



## 謝辞

ライフストーリー研究を手ほどきして下さった日本ライフストーリー研究所所長の桜井厚先生、長年にわたり現象学のご教示をして下さる東京大学名誉教授吉田章宏博士、ライフを書かせていただいた、ある姉妹たちに記して感謝申し上げます。